高知県立坂本龍馬記念館だより　2025（令和7）年1月　第132号

高知県立坂本龍馬記念館　The Sakamoto Ryoma Memorial Museum

瑞祥（ひとう）

海援隊旗（二曳きの旗）

https://www.ryoma-kinenkan.jp

瑞祥 ZUISHO SHINSHUN 新春

ここは館長の部屋　新年のご挨拶

吉村 大

新年、明けましておめでとうございます。「巳」の年が幕を開け、謹んで初春のお慶びを申し上げます。

当館は昨年に新しい5か年計画をスタートさせました。新計画の重点ポイントの一つに「展示の充実」を掲げ、常設展示室のバージョンアップをはじめ、初の他館との連携特別展や収蔵品展の開催など、これまでにない展示の取り組みを進めることにしています。

当館では本物の資料群を大切に保存し、未来に伝えていく使命を有していますので、常設展示室においては当館所蔵の龍馬真筆書簡14点の中から2点を選び、定期的な展示替えを実施することといたしました。

お正月は、薩長同盟に向けて行動をともにした池内蔵太に宛てた慶応元年夏の書簡と、先進的国家への脱皮をめざし土佐藩重役の後藤象二郎に宛てた慶応3年11月（龍馬最晩年）の「越行の記」を展示しています。薩長同盟や、その先に見通していた新政府の樹立に奔走する龍馬の息遣いを偲んでいただけます。

連携特別展では昨年、河田小龍生誕200周年を機に、「幕末史」を領域とする当館と、「美術」や「民俗」を領域とする県内3つの文化施設が連携し、それぞれの専門性を生かして「ジャーナリスト」、「画人」、「文人」としての小龍の白眉の魅力を発信いたしました。

収蔵品展においては、学芸員が「龍馬館の蔵出し」や「土佐の文芸」といった設定テーマごとに逸品を選定しており、まさしく蔵出しの展示によって収蔵品の保存と活用を図ることを意図しています。現在は、幕末維新期を中心に「絵図・地図の世界」をテーマとする収蔵品展を1月27日（月）まで開催中です。往時の人々の地理的な認識や、街づくりのありようの歴史にも考察を巡らした展示構成にしていますので、それらを体感していただければと思います。

年4回の企画展においては、龍馬の実像や幕末史の意義深さを探究するため、これまで取り上げてこなかった「分野」や「人物」を企画展のテーマにいたします。その第一弾として昨年は「龍馬と長府藩」を取り上げました。龍馬は薩長同盟に際し、長府藩士の同行を求め、これを契機に下関の三吉慎蔵に出会います。いろは丸事件の交渉や解決の内幕についても、龍馬を支えた下関の伊藤久三に吐露していますので、下関は龍馬が心を許すことのできる場所なのでありました。

本年2月からの「天誅―土佐藩の奔走―」展では、武力行使による異様な政治活動とその成り行きを紹介します。

今後とも新しい「分野」や「人物」にスポットを当てた展示を組み上げて、歴史の内幕のアップデートに努力を重ねてまいります。新年は、坂本龍馬生誕190週年の年でもあります。龍馬は混迷を極めた幕末日本の政局を打開するため、あたかも二世紀あとの現代を見通していたかのような慧眼をもって、先進的国家へと導く先駆けとなり、ひるむことなく行動しました。

今なお、とてつもなく大きな難題に直面する現世だからこそ、龍馬の志と挑戦の歴史的役割を伝播し、共感の輪を広げていかなければと強く感じています。本年も何卒よろしくお願い申し上げます。

「天誅―土佐藩の奔走―」展

天誅という言葉を聞くと、何かおどろおどろしい様子をイメージされるかもしれません。この天誅という言葉は、「天に代わって誅罰すること」（日本国語大辞典より）という意味を持ち、古く奈良時代より使われていた言葉です。幕末期の志士らは度々この言葉を用い、自らの正義を貫くため、各地で人斬りを繰り返しました。

天誅のもと暗殺された人々の首は、志士らによって持ち出され、河原や橋に掲げられます。この首には罪状文が添えられ、ここには暗殺の理由が書かれました。この罪状文の中に、天誅という言葉が登場するわけですが、罪状文すべてにこの語句が使用されているわけではありません。大抵は、「誅戮を加える」や「梟首せしめる」、「誅罰せしめる」という言葉が用いられます。ただし、実際に起こった人斬り事件の罪状や暗殺の動機を詳細にみていくと、暗殺者にとってはどれも天誅と言うべきものばかりであるため、本企画展ではこれらの人斬り事件を天誅事件として扱います。

この天誅事件を題材にしたのが本企画展です。土佐藩の役人や幕府の役人の動向や役割を追い、藩政・幕政に奔走し、時に翻弄された両役人が、天誅事件にどう対処し、結果としてどのように変化したのか、に迫ります。

天誅事件が発生するのは、文久2（1862）年以降であり、この時期は土佐藩政も幕政も大きく動き始めた頃でした。文久2年には島津久光が兵を携えて入京したほか、京都では京都守護職が新設されます。坂本龍馬が脱藩したのもこの年です。このような時代に呼応するように頻発した天誅事件は主に三都（江戸・大坂・京都）で起こりましたが、土佐藩で吉田東洋が暗殺されたほか、赤穂藩でも家老が暗殺されており、三都と比較すると頻度こそ少なかったものの、全国的に発生していたと考えられます。

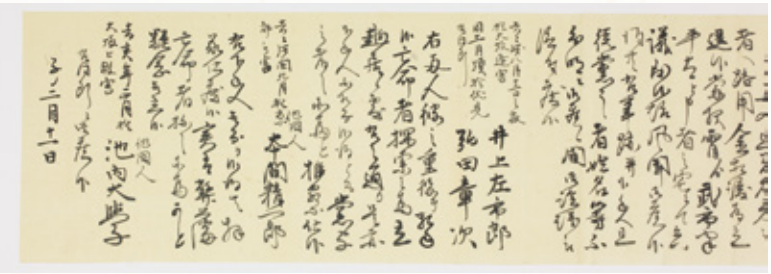
さて、本企画展では、暗殺者であった浪士側からではなく、土佐藩の役人の日記や記録をもとに、役人側から天誅事件にアプローチしているところが見どころの一つです。歴代公記をはじめ、寺村左膳日記や小原与一郎雑記抄などを詳細に読み解くことで、藩役人の役職や居所、役割を正確に特定するだけでなく、当時の土佐藩の人事がどのように決定されていたのかについても展示で触れています。

本企画展では、当館所蔵の史料を多数展示いたします。そのうち1つが、土佐藩の徒士であった岡崎菊右衛門の日記（文久2年～文久3年）です。当時菊右衛門は藩主豊範の参勤交代のお供として滞京中でした。その最中に起こった天誅事件について、菊右衛門は日記に書き記しています。京都で起きた天誅事件は土佐藩の役人もまた、見過ごせない出来事であったことがわかります。

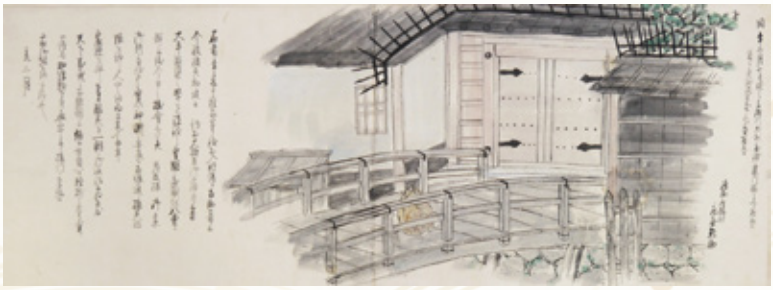
また、土佐藩京都藩邸史料のほか、他館所蔵の天誅絵巻をはじめ、生々しい記録も展示いたします。

本企画展を訪れていただくことで、当時の異様な情勢に触れるとともに、土佐藩や幕府の実態についての理解をより深めていただく機会になりますと幸いです。

上村 香乃



土佐藩京都藩邸史料No.96覚（部分）　当館蔵



幕末天誅絵巻　坤（部分）　霊山歴史館蔵

「3館連携企画 生誕200年 河田小龍
―龍馬に世界を教えた男」展を振り返って

令和6（2024）年は幕末土佐無類の絵師であり、随一の知識人であった河田小龍の生誕二百年にあたる記念の年であった。この大人物を紹介する展覧会を、当館開催期間：（10月23日～12月15日）、県立美術館（美術館）、県立歴史民俗資料館（歴民館）が連携し、開催した。

この3館は、いずれも高知県文化財団（財団）が指定管理者として管理運営する施設である（他にも2施設ある）が、実は、連携して行う展覧会は初めてである。そのため、「何がきっかけ?」と博物館関係者などから聞かれることがあった。

きっかけは「小龍日記」（美術館寄託資料）を読む会を始めたことであった。なかなか読み進めることが難しく、10年分のうち半年分くらいしか読めていないのだが、それでも、「小龍さんはスゴイ!」ということは十分に伝わり、やがて来る生誕二百年に展覧会をやろう、という動きにつながっていった（それが、5，6年前）。各館の特長を生かした展示内容を検討し、「3つでひとつ!」という三銃士のような展覧会を開催しよう、となったわけである。

美術館は画業全体、歴民館では絵馬や横幟（よこのぼり）など土佐の生活に密接した作品を、そして、当館では時代背景や見聞録、人脈などを紹介した。

「連携といっても、単に作品を分けて展示しているだけの場合もあるが、各館特長をいかし、3館で全体がみえる構成にしたのは面白い」とおっしゃってくださった方もおられ、非常にうれしかった。

それでも、小龍の幅広い活躍と膨大な作品全体は展覧会だけでは紹介しきれない。そうした点を補うべく、地域に残る作品を見学にいく「バスツアー」、小龍が得意とした漢詩について学ぶ「クロストーク」（Youtubeなどで配信）、小龍が生まれたはりまや町の周辺を歩く「ウォーキングイベント」…を開催し、好評を博した。また、展示や企画だけでなく、多くの方に関心を持っていただくため、人気イラストレーターの柴田ケイコさんによるオリジナルキャラクター「しょうりょうさん」を描いていただいたことも特筆しておきたい。（＊）

作品が多く、画題も技法も多種多彩な小龍だからこそ実現できた3館連携企画。しかし、やればやるほど、次のテーマが沸いてくる。やはり、小龍がマルチ才人である由縁であろう。次回の大展覧会はいつになるだろうか?

河村 章代

＊これらの事業の一部は（一財）地域創造の助成をいただいた。

バスツアーで訪れた津野町郷土資料館・片岡直温・直輝生家。
後ろの虎図は小龍作

ウォーキングイベント。小龍生家跡の碑

会場の様子

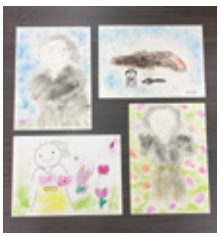
しょうりょうさん
©柴田ケイコ

龍馬まつりin記念館 振り返り

11月15日は、坂本龍馬の誕生日であり、当館の開館記念日です。15日には、例年ご好評いただいている無料開館を行い、16日と17日は「龍馬まつりin坂本龍馬記念館」を開催いたしました。

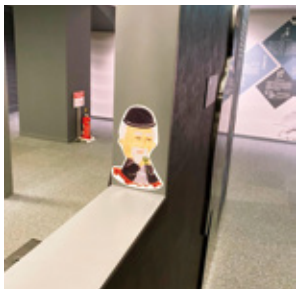
11月15日～17日の3日間は、龍馬が亡くなる直前にあたる慶応3年11月の書簡4通の特別展示を行いました。現存する最後の手紙である、11月13日付の陸奥宗光宛の龍馬書簡をはじめとし、龍馬が絶命直前まで新国家と新天地づくりを目指し、奔走していたことが分かる大変貴重な資料です。展示とあわせて学芸員による特別解説も実施し、たくさんのお客様にご参加いただきました。

16日には「龍馬のイラストを描いてみよう」のワークショップを開催しました。イラストのテーマは「龍馬とお龍の新婚旅行」です。まずは当館学芸員から複製の資料も交えながら、当時の龍馬について参加した子どもたちに説明を行いました。講師には県内の造形教室さまをお招きし、イラストを描くコツやポイントを教わりながら、思い思いの龍馬を描いてもらいました。龍馬が新婚旅行で行った薩摩の山にたくさんの花が咲いていたという話から、イラストにもキリシマツツジをイメージした花を描いて、とても鮮やかな作品が完成しました。



17日には「りょうまカルタ大会」を開催しました。高知県内で唯一のカルタ部がある土佐中・高等学校の生徒の皆さんにも参加いただき、県外からのお客様も交えて試合を行い、白熱した大会となりました。「りょうまカルタ」は、当館オリジナル商品で、ミュージアムショップで販売しています。ご興味のある方は是非ミュージアムショップでお買い求めください。

また、館内で開催している「かくれ龍馬を探そう」のイベントは、11月の河田小龍展にあわせて、県内のイラストレーター・柴田ケイコさんに描きおろしていただいた“小龍さん”を探す「かくれ小龍さんを探そう」に変更しました。意外と難しいこちらの企画は、大人の方も一緒になって館内を探している様子をたくさん見かけました。そのほかにも、17日限定の10th. coffeeさまの「海のみえるカフェ」や、内原野陶芸館さまによる出張サンドブラスト体験なども行い、多くの方に龍馬まつりにご参加いただけました。



11月15日を迎えて、当館は開館から34年目に入りました。年も明け、今年は坂本龍馬の生誕190周年にあたる記念の年となります。龍馬の「柔軟な発想」、「世界に目を向けた見識」、「果敢な行動力」など、たくさんの魅力を体感いただけるように、職員一同、より一層取り組んでまいります。今年も皆様にお会いできることを楽しみにしております。

竹田 綾

龍馬の手紙 25

高千穂峰登山記

慶応二年（一八六六）一二月四日付乙女宛書簡で、龍馬はお龍との「新婚旅行」について詳細に書き送っている。中でも目を引くのは高千穂峰登山についての事細かなレポートと挿絵であろう。筆者は昨年一〇月三〇日に龍馬夫妻の足跡を辿るべく、鹿児島・宮崎両県境に位置する高千穂峰に登ってきた。

ふもとから御鉢（書簡には「する鉢の如く」と記されている）までの行程は、龍馬も「山坂焼石計、男子でものぼりかねるほど（中略）やけ土さら〳〵、すこしなきそふ（泣きそう）ニなる」と書いている。急な斜面にむき出しの岩が点在し、火山由来の礫砂が堆積した土壌で、私自身何度も足を滑らしそうになった。想像以上の険しさであったが、山頂に到達し、龍馬夫妻が引き抜いたという天の逆鉾や、龍馬が「おもしろかりけれ（素晴らしい）」と記した、三六〇度のパノラマを見た時、何物にも代えがたい達成感を得られた。

ふもとにあるビジターセンターからは往復四時間ほどの行程であるが、夕刻下山した私は疲れ果てていた。書簡によれば、龍馬夫妻は当日朝、霧島温泉を発って約一三km程移動してから峰に登り下山後はさらに約八km下って霧島神宮を訪れて一泊している。もちろん行程は全て徒歩である。下山後にすっかり草臥れていた私は、驚くべき健脚と思わずにはいられなかった。このように資料に出てくる場所を実際に訪れ、五感を使って体験することで、人物や出来事に対する理解は幾倍にも深まっていくことを改めて実感した一日であった。

険しい登山道

山頂からの眺め

安岡達仁

龍馬館のあの日あの頃あの時間

龍馬館の歴史や普段見ることがない龍馬館の一面を写真とともにご紹介するコーナーです。 No.2

■特別展「維新十傑」開催中の日々

私にとってのあの日あの頃あの時間は、令和元年10月5日から前・後期に分けて開催された特別展「維新十傑―創造・行動・志」での日々です。

この「維新十傑」展は、国指定重要文化財の展示を目指して新設された新館で、初めて国の重要文化財に指定されている京都国立博物館所蔵の龍馬書簡等を展示するもので、当館としては念願の展示となりました。さらには、龍馬が最後に持っていた刀「吉行」も展示しました。

これら龍馬の手紙や「吉行」などについて、特別展用に音声ガイドを作成しました。

こちらの音声ガイドを担当してくださったのが濱健人さんです。濱健人さんは、大人気オンラインゲーム『刀剣乱舞』で「陸奥守吉行」の声を担当された高知県出身の声優さんです。

会期中は連日大勢のお客様にご来館いただきましたが、中でも濱健人ファン、『刀剣乱舞』ファンの女性のお客様が目を引きました。音声ガイドを聞いていただくためにタブレットをお貸しするのですが、展示室内をタブレット片手に何周もされるお客様や、ベンチに腰掛けて解説の音声を文字起こしされる方など、皆様思い思いに特別展を楽しんでおられる姿が印象的でした。

館の方でも、文字起こしをされるお客様用に音声を文章にしたものをショップで販売したり、「吉行」の刃紋がご覧いただき易いよう展示の際の角度を調節するなどの工夫を加えて展示させていただきました。また、高知に宿泊されて連日通われる県外からのお客様も来られたりと嬉しい悲鳴を弾ませる毎日でした。

私は龍馬記念館に勤務し始めて日が浅かったのですが、こんなにも龍馬さんのことを慕って下さる皆様を目の当たりにして、感激したのを思い出しました。

ようやくコロナ禍も収まり、インバウンドのお客様も増えてきました。今年も賑やかな一年となりますよう、皆様のご来館をお待ちしております。

米澤 まどか

学芸員の視点

初めての取り組み「フレンドリーデー」

三浦 夏樹

12月21日（土）に、当館では初めてとなる「フレンドリーデーｉｎ坂本龍馬記念館」という取り組みを行った。この取り組みは、光に敏感な方や大きな音が苦手な方にも楽しんでいただけるよう、館内の光や音に配慮したものである。高知県内ではすでに、高知県立のいち動物公園や高知県立足摺海洋館ＳＡＴＯＵＭＩで実施されている。

今回の取り組みに際し、高知大学医学部の先生方をはじめ学生の皆様、高知県子ども・福祉政策部障害福祉課、明治大学、東京理科大学など多くの方にご協力いただいた。５月から打ち合わせや館内の調査を重ね、９月には私たち職員が感覚過敏について理解するための研修を行い、実施に向けて準備を整えてきた。

恥ずかしながら、これまで私は感覚過敏の方について意識したことがなく、今回初めてこういう方々の視点で館内を見て、色々と気付くことができた。

新館は暗く静かな展示室なので問題無いかと思っていたが、実はその中にも大きな問題点があった。天井からのスポットライトは、新館完成時に設置されたものと、私が追加したものの２種類がある。この追加したスポットライトが問題だった。休憩用の椅子で文字を読む人がいるので、少し強めの光が欲しいと思って２年目に追加した。その際、展示ケース内で使用するスポットライトが余っていたので、それを天井灯として使ったのが過ちだった。ライトにカバーがないため、どの角度からも強い光が目に入ってしまうのである。以前、光の専門家にライティングは難しいものだと教えられていたが、配慮が足らなかった。

本館の方は映像や音が流れる展示物が多く、これらの音も極力小さくした。しかし、すべての要因を排除できるものではないので、センサリーマップを作って、感覚過敏の方にとって注意が必要な場所を示した。

当館にとっては初めての試みで、まだまだ不十分な所も多かったと思う。しかし、こうした感覚過敏について知ったことが第一歩であり、今後も改善に努めたい。

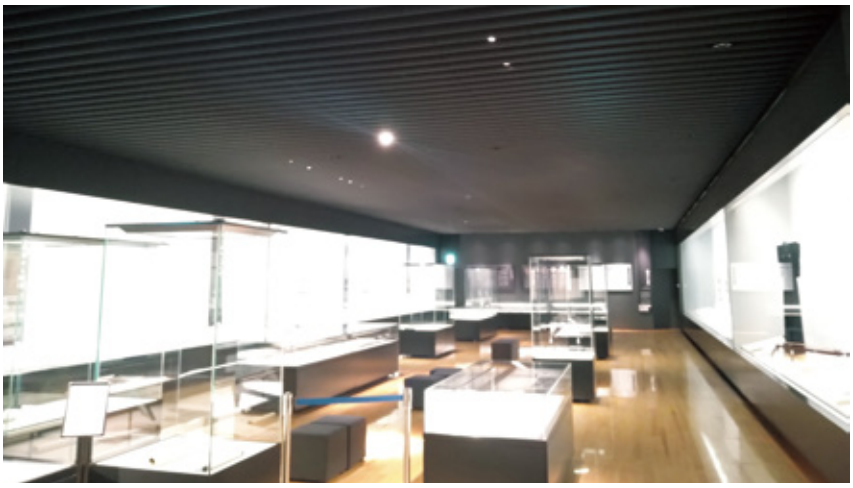
私は以前から「友とするに悪き者七つあり」という言葉を心に留めている。これは『徒然草』の一節で、七つとは「一つには、高くやんごとなき人。二つには、若き人。三つには、病なく身強き人。四つには、酒を好む人。五つには、たけく勇める兵。六つには、虚言する人。七つには、欲深き人」である。

この中で注目すべきは、三つ目の「病なく身強き人」である。一見、友とするには良いように思うが、こういう人は人の痛みを理解できないことが多いので、「友とするに悪き者」なのである。スポットライトの一件がこれに当てはまり、今回気付けて良かったと思う。

龍馬は文久３（１８６３）年５月17日乙女宛の手紙の中に「達人のみるまなこハおそろしきものとや、つれづれニもこれあり。猶エヘンエヘン」と書いているので、間違いなく『徒然草』を読んでいる。おそらく「友とするに悪き者」も知っていただろう。

龍馬の手紙は、常に相手を思いやって書かれており、優しい人柄が表れている。龍馬は人の痛みを理解できる人である。そのため、当館も龍馬のように人を思いやり、寄り添える館であるべきだと思う。

（左）展示ケース用　（右）展示室用



真下を照らすスポットライトの違い

ミュージアムショップ便り

ミュージアムショップのある本館２階“幕末広場”では、至る所で強烈な印象のイラストが目に留まるはずです。また、ミュージアムショップにあるパネルをご覧になったお客様から、「これはどなたが描いたのですか?」「販売はしていないのですか?」と度々尋ねられます。そこで今回は、イラストレーター:奈路道程さんの関連商品と昨年11月の“龍馬月間”についてご紹介いたします。

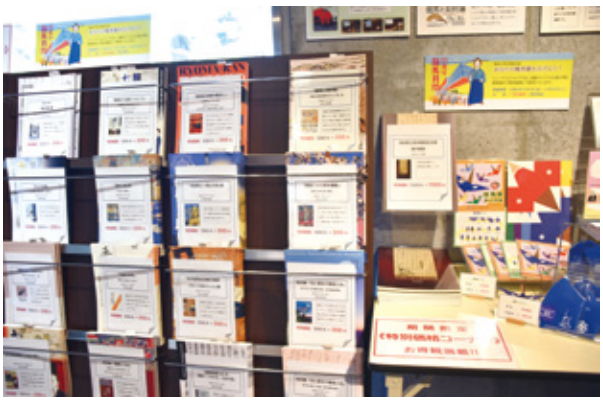
商品のイラストは、令和元年10月から2ヶ月間開催された当記念館の特別展「維新十傑」で採り上げた十傑を基に、奈路さんの感性で10人が描かれました。この特別展の際、“「維新十傑」～奈路道程イラスト展～”も海の見える・ぎゃらりいで開催され、“十傑”の他、“龍馬をめぐる女たち”や“土佐の昔の風景”も出展されていました。ここからリニューアルグッズが生まれたのです。

奈路道程さんグッズ

「維新十傑メモ」は、個性的な表情の“十傑”が表紙を飾り、中身はペールカラーの十人十色を選んでご利用いただけます。次に**「オリジナルアクリルキーホルダー」**は、アクリル素材に、奈路さん独特の描線と黒色使いで描かれた“龍馬”に仕上がっています。また**「ポストカード」**は、並んだ龍馬とお龍が、さりげなく同じ方向を観ている感じです。そして**「A4クリアファイル」**は、龍馬とお龍が表裏面にそれぞれ印刷された1枚ものになっています。無言の存在感で彩られた奈路道程さんグッズを、是非ショップでお楽しみください。

また奈路さんグッズの他、期間限定商品として、一新された趣の**“龍馬生誕190周年2025カレンダー”**も販売しております。是非こちらもご覧ください。

維新十傑メモ



龍馬月間の様子

11月の龍馬月間では、“あなたの龍馬観を広げよう!”と題して、当館発行の書籍・冊子類やポスターなどのグッズを特別価格にて販売いたしました。11月15日の当館開館記念日や、龍馬まつりなど、龍馬ファンは勿論、龍馬って?とご興味を持って下さった方たちが大勢ショップにも訪れてくださいました。

2025年は、もっと“龍馬と龍馬記念館”に関心を持っていただける商品展開を目指し、ミュージアムショップ一同、皆様のご来館をお待ちしております。

中村 昌代

海の見える・ぎゃらりい

■「海の見える・ぎゃらりい」

「海の見える・ぎゃらりい」と屋上の展望スペースからは太平洋が一望できます。ある日、館内の見回りをしていた時、ふと、「ここから見える水平線はどれくらい先のものなのだろうか？」と思いました。気になることは即調べようということで、計算してみました。今回はその結果を皆様にも共有させていただきます。

水平線までの距離は、三平方の定理を用いて求めることができます。この定理は、直角三角形において、斜辺（直角＝90度の角に対する辺）の2乗は他の辺の2乗の和に等しい、というものです。ここで図1を参考に、海抜0m地点に立った時の水平線までの距離を考えてみましょう。桂浜の砂浜に立った時を想像してみてください。図では、円が地球を表しており、便宜上、人をかなり大きく描いています。また、以下の計算では、地球の半径を6370km、人の身長（≒目線の高さ）を170cm（0.0017km）として計算します。なお、私と同様、数学はあまり得意ではないという方もおられるかと思います。そのような方は太字部分の計算結果のみお読みいただいても結構です。

三平方の定理より、r^2+d^2=（r+h）^2となり、これを計算すると、d=√（2rh+h^2）　となります。

（※√（平方根）:√25＝±5というように、2乗すると√の中の数になるような数を表します。）

h^2は限りなく0に近い数であるため、ここでは無視します。するとd=√（2×6370×0.0017）≒4.65（km）となります。つまり、**水平線までの距離は約4.65km**であることが求められました。意外と水平線までの距離が近いという印象を持たれる方が多いのではないでしょうか。

では、当館から眺めたときの水平線までの距離はどれくらいなのでしょうか。図2を使って考えてみましょう。ここでは屋上から眺めた場合を想定していますが、「海の見える・ぎゃらりい」からでもほとんど誤差はありません。

当館は浦戸山の頂上に位置し、館が建つ場所は標高約50m（h3）です。そこに建つおよそ10mの建物の屋上（h2）から、170cmの人間（h1）が眺める場合を想定して考えてみましょう。

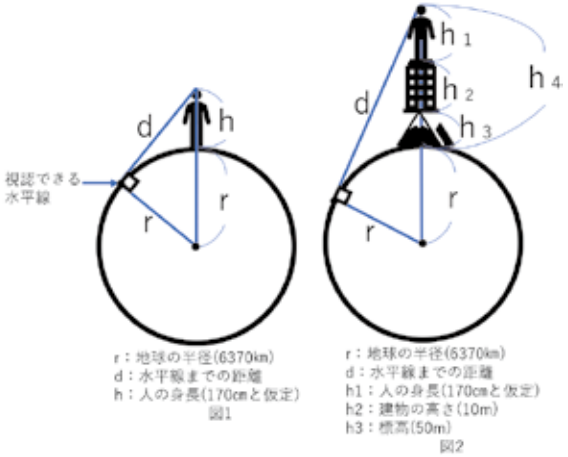
ここでも三平方の定理を用いて、次のように計算することができます。

r^2+d^2=（r+h4）^2となり、これを計算すると、d=√（2rh4+h4^2）となります。

ここでもh4^2＝0.0038…となり、0に近い数値のため無視をすれば、d≒28（km）となります。つまり**水平線までの距離は約28km**であることが分かります。

どうでしたか？桂浜から眺めるときと当館から眺めるときでは、水平線までの距離がだいぶ違っているということをご紹介しました。「海の見える・ぎゃらりい」や屋上から眺めを楽しむ際の参考にしてみてください。

安岡 達仁



入　館　状　況

2024年12月20日現在

（1991年11月15日開館以来 33年36日）

◆入館者数　4,723,081人

■リニューアルオープン（2018年4月21日）以来　786,321人

編集後記

「令和」も、はや7年目の新春を迎えました。昨年はパリオリンピック・パラリンピックにおける、高知県勢を含む多くの選手のメダル獲得など明るいニュースもありましたが、元日の能登半島地震、翌日の羽田空港航空機衝突事故など悲しいニュースも多く見聞きしたように思います。今年は少しでも「今き（よき）」年、「調和のとれた平和な」年になることを願うばかりです。

本年は元日のみメンテナンスのため休館させていただきますが、2日からは通常通り開館しております。龍馬生誕190年となる本年も、皆様のご来館をお待ちしております。（や）

館だより“飛　騰”第132号（年４回発行）表紙題字：書家 沢田 明子氏
発行日　2025（令和7）年1月1日
発　行　公益財団法人高知県文化財団
高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
http://www.ryoma-kinenkan.jp
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間　9:00～17:00　年中無休
入 館 料　一般 500円（企画展開催時 700円）
高校生以下無料
高知県・高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者（1名）は無料

「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は120円切手をご希望回数（4回分まで）お送りください。
〒781-0262　高知市浦戸城山830　高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読 係 まで